

ヨーロッパエコツアー 見聞記



新旭町
八田知昭

おつぎ
二十世紀末の昨秋、財団法人環境保全財団企画のエコツアーに参加して、環境先進国・みどりの国ドイツ、そして世界遺産の宝庫といわれるイタリアとパチカンへと立ち、いろいろ見学させて戴くことが出来ました。

日本の容器包装廃棄物の 収集と散乱

我が国では、容器包装リサイクル

ル法が平成七年六月に公布、同年十二月に施行となり、平成九年四月からガラス製のビン、ペットボトル、飲料缶および紙パックが市町村で分別収集され、特定事業者によって再商品化されています。

近年、消費の拡大にともないこれらの一般廃棄物の排出が多くなつてきて人口約一万人の私の町のことでありますが昨年度、町が収集処理した容器包装廃棄物の数量は、ビン類七二トン、缶三二トン、ペットボトル八トン合計一一二トン（前年比三三三トン増）です。また、新聞、雑誌、段ボールなどの古紙の回収数量は二一三トン、その他粗大ゴミを併せますと総計で一一、四六〇トンとなり、町民一人当たり約一トンという勘定になります。さらに、回収が徹底されればもつと大きな数字となることでしょう。環境美化地域の指定やノーポイ運動、環境美化運動などが行われていることは誰しもご承知のところですが、残念ながら、空き缶、空き瓶類が散乱している情景を沿道や公園等によく見かけるのが現実です。

今、私たちが真剣に考えなければならぬのは、もちろん環境美化問題もありますが、資源は有限

と、言うことを十分承知しなければならぬことだと思えます。

例えば十万年もかかって出来た化石燃料を、わずか一年で使っているいいものでしょうか。やはり資源は有限で再利用を図らねばならないという考えを、皆が持ち合わさねばならない時が来ているのではないのでしょうか。

酒やビールのビンは酒屋さんが回収し再利用するということは昔からよく知っていることですが、空き缶や空き瓶をポイと捨てずに、なせりサイクルできないのでしょうか。一時行われたデポジット制度等が、なぜ定着しなかったのでしょうか。

さて、ドイツでは

ドイツは、ほぼ日本と同じ面積で人口密度が高く国民の消費も多いことから自然に資源を大切にしなければという認識が高く、特に三十年前から有名な「黒い森」が枯れ始めてから、国全体に自然環境をさらに保全しなければという意識が高まる一方、資源のリサイクルが一段と進められてきたようです。

そのためか、街角や公園、道路沿線に空き缶や空き瓶、煙草の吸

い殻や紙屑のポイ捨てが見あたりません。

ところで、ドイツにおける容器包装廃棄物の収集は、我が国のように行政がすべてを行うものではなくて、いわゆる「緑のマーク」のついた容器包装廃棄物は、DSD社という民間組織が責任を持って回収し、リサイクルするという仕組みとなっています。

そのDSD社を訪問していろいろと説明を受けましたが、概略申しますとDSD社は一九九〇年に消費財、原材料等の製造販売業者約二〇〇社が出資して設立された、容器包装廃棄物の収集、リサイクルシステムの運営、ノウハウの提供を行っている会社です。



ドイツの農村風景

DSD社による収集量は約五〇〇万トンで、収集率は七九パーセント。そして再資源量は約四九〇万トンで、リサイクル達成率は七七パーセントとなっていて（一九九五年資料）その内訳は古紙・段ボールが九〇パーセント、ガラス瓶八二パーセント、プラスチック六〇パーセントです。

緑のマーク

「緑のマーク」が付けられている商品の廃棄物は街角に配置された専用の収集ボックスに投入すれば無料で収集される仕組みとなっています。現実に町の商品を買って見ましたが、紙コップ、ボトル、写真のフィルム箱、封筒の包み紙等、一目でよく分かりました。

日本でも、グリーンマーク、エコマークやプラスチックのリサイクル商品、飲料缶のアルミ、スチ



街角に置かれた収集ボックス

ール別のマークが付いていますが、いずれも業者が直接収集するためのものでないことは皆さんご承知のとおりです。

もちろん「緑のマーク」商品の収集には経費が掛かりますが、その資金源は商品にマークを付けるにあたって、DSD社が徴収する登録料です。（九十五年度会計で約三、〇〇〇億円）結局、メーカーが生産、販売の後、責任を持って収集しリサイクルするということ。そして、ごみの減量と消費が資源の大切さを認識することにも役立っているようです。

ハノーバー万博

人間・自然・技術をテーマとした今世紀最後の万博も、終幕近くとあって既存の国際見本市会場を中心とした一七〇ヘクタールに及ぶ会場は、大勢の人で各館とも入場者の長蛇の列がみられました。

一般廃棄物のリサイクル、土と実際の植物で生態系の保全を強調したDSD社関連のパビリオン、芸術性や最新技術を織り込んだ地元ドイツ館、食堂まで設置した韓国館、日本館は再生紙で繭玉状のドーム屋根が目を引き、地球温暖化防止関連の展示や、二〇〇五年

に開催決定の愛知県海上の森の紹介もあり、自然環境保全を重視した会場設営であって欲しい思いがしました。



ハノーバー万博・日本館前にて

風景に学ぶ

風景は生きた教科書と言われますが、確かに街や農村を始め自然の風景を見て、いろいろ感心したり、反省の材料になったりします。ドイツへの旅行は私にとっては

三度目ですが、快適なアウトバーン沿線は、相変わらず広告の看板が目立たず、ゴミ散乱もなく、その上、自然樹林が美しく、車窓から眺める農村集落は教会の建物を中心とした静寂な佇まい。都市部では歴史を重んじた建物が並び、ポスターは大型で絵を見ているよう

な気分させられる。路上にはタバコの吸い殻もなく清潔でした。前回と比較して新風景と見て取ったのは、郊外での風力発電施設（風車）と燃料用の菜種畑で、さすが環境重視の国の風景。



風力発電施設

イタリアへ飛ぶ

ドイツでの環境学習を終えた一行は、アルプスの山々を眼下にしてイタリアへと飛びました。

日本の縄文・弥生の頃から、既に都市づくりがなされていたポンペイの遺跡、二〇〇〇年という聖年で大きな宗教行事が続くパチカントローマを見学、日本の木の文化のよさもさりながら、一方、高い芸術性の石の文化に素人ながらも感動を覚えさせられました。